

平成 22 年度日本医学図書館協会近畿地区会  
日本薬学図書館協会近畿・中四国・九州地区協議会  
近畿病院図書室協議会 共催シンポジウム

研修部

日時：2010年10月25日（月）13:00～16:40

場所：大学コンソーシアム大阪

テーマ：エビデンス作成とライブラリアンの役割—「診療ガイドライン」と「コクランレビュー」を例として—

プログラム：

1. 日本医学図書館協会の診療ガイドライン作成支援事業に参加して  
奈良県立医科大学附属図書館医学情報係長 鈴木孝明氏
2. コクランレビューと図書館のかかわり  
奈良県立医科大学医学部医学科 中央手術部助教 田中 優氏
3. 診療ガイドラインと図書館のかかわり  
京都大学大学院医学研究科 薬剤疫学分野准教授 樋之津史郎氏

参加者数：8名

学術論文が信頼を得るためには、根拠となる情報源の信頼度の高さが必須条件です。今回、特に高いエビデンスレベルが求められる「診療ガイドライン」ならびに「コクランレビュー」の作成過程における図書館員の役割がテーマでした。

周知のとおり、専門家の経験や意見交換を元に作成されていた診療ガイドラインは過去のものとなり、現在は「エビデンスに基づいたガイドライン」が主流です。

実際に多くの診療ガイドライン作成にかかわってこられた鈴木・樋之津両氏の講演では、

より正確で有用なガイドライン作成のためには、国内外の膨大な情報を網羅する必要があり、日本医学図書館協会診療ガイドライン作成支援事業に参加されている図書館員の文献検索業務が、重要な役割を担っていることを実感できました。

また、今回初めてコクランレビュー作成者側からのお話を聴くことができました。多くの診療ガイドラインのエビデンスになっているコクランレビューにも、当然ながら参考とする情報があります。その収集量は診療ガイドラインの比ではなく、検索式を作成するのも気が遠くなる作業ですが、コクランでは Trials Search Coordinator と呼ばれる専門スタッフが検索戦略を立案してくれるとのことでした。

それぞれの講師から「エビデンスを重視する場合には、文献検索は避けて通れない過程であり、図書館員の参加や協力が欠かせない」との言葉をいただきました。

診療ガイドラインもコクランレビューも、一度作ってしまえば恒久的に通用するというものではなく、現状に見合うよう修正を加えていかななくてはならず、図書館員は自らの知識を常に更新していくことが求められます。

さらに文献検索によって収集された文献は玉石混合であり、批判的吟味を行うにも膨大な労力を要するため、将来的には図書館員による文献の質の評価支援を求める声も聞かれました。

（文責：高橋育子／姫路聖マリア病院）